

Title	<書評> Shannon Winnubst ed., "Reading Bataille Now", Indiana University Press, 2006
Author(s)	宮澤, 由歌
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 243-247
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5594
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Shannon Winnubst ed.
Reading Bataille Now
Indiana University Press, 2006

宮澤 由歌

1 全体の構成

本書は Georges Bataille(1897-1962) に関する考察を集めた論文集である。編集者は Shannon Winnubst とある。編者は主に二〇世紀フランス哲学史の専門家だが、クイア理論や人種問題など現代社会の問題への考察も行っている。

二〇〇七年にインディアナ大学出版から発刊された本書は、Winnubst 自身の研究志向が色濃く現れている。イントロダクションで、彼女は現代的な経験やその形成の問題に対し、新しい思考の切り口を与えるものとしてバタイユ思想を用いることを提案する。本書はバタイユの思想的著作のなかでも特に「呪われた部分」三部作を扱っている。いわゆる『普遍経済論への試み』『エロティシズムの歴史』『至高性』の三作品がそれぞれにあたる。「呪われた部分」の特徴は、経済論的な枠組みのなかで至高なものが論じられる点にある。本書は、主にバタイユの経済論のなかに、現代社会の問題を解決するための可能性を見出していく。

バタイユの作品が、エロティシズムや宗教などのさまざまな具体的問題を提起すると同様に、本書も多様な視点からの論考が揃っている。各章には「バタイユの布置」、「侵犯の快楽と神話」、「身体と動物性」、「至高な政治」とタイトルがつけられ、それぞれ三本ずつの論文が収められている。「バタイユの布置」では、政治的・哲学的な歴史の一部とバタイユを関連つけた論考が揃う。Jesse Goldhammer のバタイユとキリスト左派についての考察、Amy E. Wending によるマルクスの経済論とバタイユの経済論の対比、Pierre Lamarche によるバタイユのシュルレアリスム脱退とサド受容を通じた論考など、おもにバタイユの経済論を歴史化

し、そのルーツを探るような考察を多く見ることが出来る。「侵犯の快楽と神話」「身体と動物性」では、編者の Shannon Winnubst を筆頭に、クイア理論やフェミニズムとバタイユ思想の特に「侵犯」概念が関連づけられ考察が試みられる。「至高な政治」は Andrew Cutrofello と Richard A. Lee Jr.、Allan Stockli によって、さらに具体的に、バタイユの一般経済の概念が現在の経済や政治性の問題を打破する糸口が考察されている。以上で見るように、本書にはふたつの特徴を見いだせるだろう。ひとつめの特徴は「呪われた部分」の経済論を軸とした論考が収められている点、二つめの特徴は論じられる領域が幅広い点である。

本書評では、たくさんのテーマを含む本書を包括的に書評で扱おうとするのではなく、特に第二章「侵犯の快楽と神話」に収められた「バタイユのクイア快楽——蜘蛛の網掛け、あるいは唾吐きとしての宇宙」を重点的に検討したい。というのも、この論考がバタイユのエロティシズムの問題を特にクイア的な視点から取り扱い、それと同時に、九〇年代に発した比較的新しい性の思想に対するバタイユ思想の影響を探るとても興味深い論考になっているからである。当論文の著者は本書の編者である Shannon Winnubst であり、彼女が著者のひとりとして本書に寄せた論文を見ることは、その全体的な目的と意図をより明確にするのに適切だと考えられる。

2 バタイユのクイア快楽——蜘蛛の網掛け、あるいは唾吐きとしての宇宙

この論文は、従来のクイア理論で援用されてきたラカンやフーコーの

「欲望」の読解から始まる。読解を進める途中で、Winnubst はセクシュアリティ概念とエロティシズム概念に関する独自の主張を行っている。彼女はまずバタイユがセクシュアリティとエロティシズムを区別しエロティシズムを重要視していたことに注目する。そして近代的な主体性と不可分に存在するセクシュアリティ概念が、バタイユが批判した限定経済の論理に属する一方で、エロティシズム概念はそれを超えた一般経済の論理に属することを指摘する。この注目点が、この論文において最も独自の興味深い点である。以下で詳しく見ていこう。

論文のはじめの方で、Winnubst は、「欲望」の問題がクイア理論の発展の中核であり続けたことを指摘する。その上で指摘されるバタイユの影響については、次のようにまとめられている。

バタイユは、主に不在によって形作られた意識は侵犯を介しては打ち破れないことを暴き出す。禁止の法は、主体性の中核となる不在を激化させる一方である。また、禁止の法によって人は目的論の論理とそのアイデンティティ・ポリテイクスに縛り続けられる。つまり、侵犯は欲望についての限定経済を再び主張するだけなのである。〔…〕バタイユは、禁止・侵犯、そしてその欲望・不在という主体性さらにそのアイデンティティ・ポリテイクス・目的論といった支配と正常のこの論理から距離をおいている。そうすることで、彼は有用性に関する限定経済を浮かび上がらせるのである。¹⁾

この文章にラカンとフーコーの思想を見つけてるのは簡単なことである

う。実際、論文のここまでの段階で、ラカンとフーコーの「欲望」がクイア理論によって消化される過程が論じられている。ラカンとフーコーが程度の差はあれバタイユを読んでいたことを踏まえれば、両者の思想を解説する糸口を系譜的にバタイユに遡る Winnubst にわたしたちは簡単に賛同できるはずである。

ラカンの「欲望」については次のような解釈がなされている。全体性・完全性といった純粹な根源への回帰に対する欲望があり、ラカンにおいてそれは主体の構成要素になっている。フェミニズムや人種問題の理論家たちはラカンのこのモデルをしばしば採用する。しかし、近年のクイア理論の領域でこの動向を問い直す議論がある。Tim Dean は、ラカンに与つての「欲望」がポスト象徴的な現象としてのみ読み込まれており、したがって現実界と対象 a が存在論的に欲望に優先する余剰の資源として位置づけられていることを指摘する。Dean は、ラカンが現実界に関して奇妙なレトリック「不在の不在」によって欲望の定義を行おうとしていることに注目を促す。

フーコーに関しては、『性の歴史』第二巻に注目して「欲望」の解釈が進められている。フーコーはラカンの欲望の理論に批判を加えながら、同時に大きな知の枠組み、すなわち認識モデルに対する疑問を投げかける。プラトン・ソクラテスの伝統までさかのぼり欲望を歴史化するなかで、フーコーがニーチェに沿うようにして近代の西洋的な認識論に対する問題提起を行うことに Winnubst は注目する。不在の論理からすれば、わたしたちは欲望するものに対してつねに目的論的に追求しつづけなければならぬ。その不在の欲望についての知が、政治的・心的生すなわ

ち主体のすべての論拠となつているからである。「その認識モデルはわたしたちを現象や歴史の出来事や心理学的欲望の現象の根源の探求へと向かわせ」る構造になつている。フーコーが、欲望する主体を生産するための欲望に対する懐疑を持ちつづけていたことを Winnubst は強調する。

Winnubst は両者の解釈を踏まえたあと、ラカンに対してはバタイユのセクシュアリティとエロティシズムの区分というテーマから、またフーコーに対してはバタイユの非・知というテーマから検討を行う。両者に共通して影響を与えたと考えられるものとして、バタイユの禁止と侵犯の論考が挙げられている。レヴィー・ストロースを参照して語られる近親相姦の事例で、バタイユは、近親相姦の禁止が家族の絆をエロティックなものにし、さらにその禁止がエネルギーを持続的に他の閉じた家族のなかに流す構造を可能にすることを明らかにする。本論文では、この禁止と侵犯が、欠如(不在)と目的論の限定経済を永続化させていると解釈される。欠如(不在)がラカンによって示唆され、目的論がフーコーによって示唆されたことはすでに上記のとおりだが、Winnubst によればバタイユはこの現象から距離をとりそれを客観的に捉える。そしてバタイユは、欲望に代わる新たな可能性(普遍経済論上の可能性)を念頭に置き、「欲望」の存在論的な規定に限界があることを示唆し、ラカンやフーコーもその可能性を認識していた。その結果、ラカンにおいては「不在の不在」というレトリックが生まれ、またフーコーにおいては認識論モデルへの問題提起という示唆があったのだと Winnubst は主張する。

では、バタイユによる欲望に代わる新たな可能性はどのように記述されているといえるのだろうか。本論文の最後の部分では、それを「バタイユのクイア快楽」として、バタイユの小説の記述の考察に場面が移る。ここで、その考察を見ていく前段階として、バタイユとラカンとの違いにエロティシズムとセクシュアリティを据える Winnubst の主張について概観しよう。

Winnubst はバタイユにおいてセクシュアリティとエロティシズムが次のように区別できることに注目する。エロティシズムは汚れたもの（特に動物性）への持続する魅力である。エロティックなものはポトラッチや供犠などにも見いだすことができ、そこにセクシュアリティという概念はまだ出来上がっていない。Winnubst は、現代社会においてセクシュアリティはエロティシズムに還元できるとしても、エロティシズムはセクシュアリティに完全に還元することはできないと述べる。「クイアであるということは、ホモセクシュアル〔同性愛者〕であるということではない」と述べる Winnubst は、セクシュアリティについては次のように考える。セクシュアリティは深く主体性と関わっており、セクシュアリティが形成される経験の領域では、有用性が足場を得、有用性は近代的個人の欲望の流入を受け入れる。ラカンを含め、精神分析がエロティシズムをセクシュアリティに完全に還元したことを指摘し、そうでない快楽の可能性をバタイユのエロティシズムに見ようとするのである。

そして、本論文の最後の部分で Winnubst がバタイユの快楽のひとつの例として持ち出すのは「目玉の話」である。ここでは体液、卵、血、身体などあらゆるものが快楽の源になっており、欲望の法を超えるもの

が描かれている。彼女はこの物語について二つの特徴を述べる。ひとつは、登場人物たちのモノログが描かれなかったために、彼らの主体性を産出するのである。「彼らは何を欲望しているのか」「彼らはそもそも誰なのか」の問いに答えが用意されていないことである。これは、フーコーが提起した問いに対するひとつのヒントになると考えられよう。また、この快楽は欲望という深い心理的な構造や終わりのない禁止の侵犯に突き動かされたものというよりも、血や目玉や尿といった彼らの内的な生に対し外在化されたエネルギーに突き動かされるようにして生じているということも特徴として挙げられている。Winnubst は、これが自己の欠乏を欲し全体性や完全性を目指す不在の論理とは対照的な運動であることを示唆している。

バタイユの一般経済や非一知、そして文学に表されたエロティシズムの具体的素材を丁寧に論じ、Winnubst はクイア理論の今後のラディカルな方向性を以下のように示唆して論文を終える。「クイアであるということは、欲望の法に応答することではない。クイアはわたしたちが誰でもあるのか、またわたしたちはどこへ行くのかということについて何も教えてくれない。有用性とアイデンティティ・ポリティクス倫理が拡大するさなかで、アイデンティティの拒絶はもつともラディカルな政治性に属しているのかもしれない」。

わたしたちはこの論文に対していくらかの検討を加えることができるだろう。Winnubst の姿勢は、一九九〇年代後半にクイア理論の領域で興隆したポスト・アイデンティティ思想を継承するものだと言える。主体性に基づく戦略を取らないことをクイアの定義のひとつとする考え方

は、現在のクイア理論のなかでも浸透している考え方で、Jo Eadieら多くの理論家が主張するものでもある。また、バタイユ思想の大きな特徴としての「非・知」は近代知の秩序へのアンチテーゼといえることができ、アイデンティティなき政治に対して与える影響も決して少なくない。ただ、バタイユの欲望に関する論考については、当論文で挙げられたもの以上に可能性が残っているといえる。

「欲望」に関する考察としてバタイユの文学作品を持ち出すことはとても有意義なことである。ただし、それだけがバタイユの「欲望」や快樂についての考察の素材としてあるわけではない。むしろ『エロティシズムの歴史』が、生前に発刊される『エロティシズム』の草稿として位置づけられることに注目すべきだろう。両者は別の書物と言ってもよいほど改稿が行われている。その方法論上の差異を岩野卓司は『エロティシズムの歴史』では、科学的な視座から対象の分析がなされているのに対し、「……『エロティシズム』では、科学的探求方法に対して経験的な方法の優位を唱えている」と指摘する。『エロティシズムの歴史』でエネルギーの経済論を基盤として考察が進められたのに対し、『エロティシズム』では内的な経験を重視しながら考察が進められる。ここでは、エロティシズムに対して「主体」や「客体」という単語を用いて科学的に記述するのではなく、まさに非・知を実践することで「主体」も「客体」も存在しないようなエロティシズムを描き出しているといえるのである。エネルギー論でも、大枠としての非・知の説明でも文学的フィクションでもない、まさに内側からの思考の記述を試みる『エロティシズム』における快樂の把握には、いまだその新しい解釈を生み出す可能性

が残るといえることができるだろう。

3 おわりに

本書では、多彩な分野にわたるバタイユ思想の共有が実現した。その意義は何であると言えるだろうか。Wimubstの論考が本書の全体的な縮図として完全に扱われるわけではない。しかし当論文をみてもわかるように、バタイユの経済論は有用性というひとつの価値を超越するための基盤になる考え方を有している。本書が扱うテーマの広さとその注目は、バタイユの一般経済学思想が、現代における政治や倫理の論戦に対してラディカルな批判として効果をもち、さまざまな問題への支配的な見方に対する検討を行うために有意義であることの証左となっているといえよう。

註

(1) p.81-82

(2) p.91

(3) 『ジョルジュ・バタイユ』、2010、水声社、p.30。